

『有 終』 第3輯 一高梁中学校一

刊行のことば

有終資料篇第三輯を刊行することになりました。第一輯「山田方谷と有終館」、第二輯「順正女学校」に続いて、高梁中学校に関する資料を紹介するものであります。

明治二十八年に創設された高梁中学校は、その歴史と伝統にふさわしく数多くの資料を今日に伝えています。この度は、それらの中で高梁中学校との関わりが明白な遺墨を選びました。また巻末の資料は、明治三十七年の「学校一覧」、昭和十一年の「教育要覧」をそれぞれ抜粋し、当時の教育内容を知ろうとするものであります。

本校は平成七年には高梁中学校創立百周年、順正女学校創立百十五周年、高梁高校発足四十五周年を迎えます。この記念すべき年を機に創立記念特別事業を実施することになっており、本書の刊行はその一つとして位置づけられたものであります。どうか同窓生はじめ多くの方々に愛読され、歴史を繙くよすがとなることを願ってやみません。

刊行にあたって、金沢大学名誉教授山田琢先生、山陽印刷株式会社をはじめ、多くの方々のご協力に厚くお礼申し上げます。

平成四年十一月

岡山県立高梁高等学校長

南 智

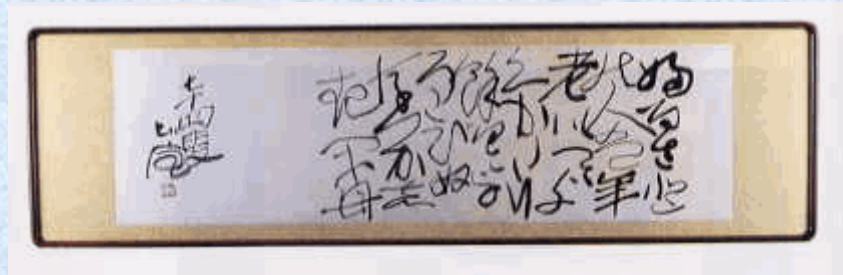


東郷平八郎（1847～1934）

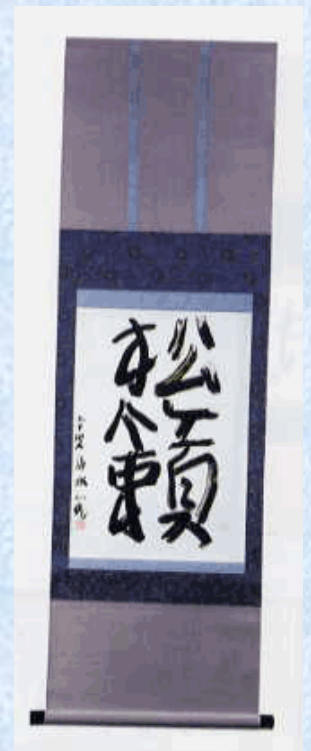


明治から昭和前期にかけての海軍軍人。薩摩藩士東郷吉左右衛門の四男として薩摩国鹿児島郡下加治屋郷（現鹿児島市加治屋町）に生まれる。初め仲五郎と称し、元服して平八郎と称す。文久三年（1863）17歳で薩英戦争に参加したあと、慶応三年（1867）薩摩藩の海兵隊に入隊、戊辰戦争にも鹿児島藩軍艦「春日」乗組員として参戦し、幕府海軍と戦った。明治維新後の新海軍においては明治四年（1871）二月から七年間、イギリスに留学、帰国後明治十二年海軍少佐、明治十九年海軍大佐に昇進、また明治二十七年の日清戦争においては、巡洋艦「浪速」艦長として出役している。終戦後、明治三十一年海軍中将、明治三十六年連合艦隊司令長官に就任、翌年海軍大将に昇進した。明治三十七年に始まった日露戦争では全期間にわたって自ら主要作戦を指揮し、特に明治三十八年五月二十七日の日本海海戦においてロシアのバルチック艦隊を撃破、歴史上にその例を見ない完勝を収めた。将師としての東郷の人格と統率力はすぐれ、ネルソンと並び称される救国の英雄として内外の称賛と尊敬を受けた。日露戦争後、明治三十八年十二月海軍軍令部長、明治四十年九月伯爵を授けられ、明治四十二年十二月軍事参議官となり、大正二年（1913）四月、元帥。その後大正三年四月から大正十年三月まで東宮御学問所総裁をつとめ、昭和九年（1934）五月三十日の死去直前に侯爵となり国葬となった。

清水比庵（1883～1975）



書家、歌人。現高梁市荒神町に生まれる。比庵は号で本名は秀。高梁中学校、第六高等学校を経て明治四十一年（1908）京都帝国大学法学部を卒業。卒業後は司法官として神戸地方裁判所へ勤務、退官後は安田銀行、古河電機工業会社などに勤めた。昭和五年（1930）栃木県日光町（現日光市）から懇請をうけて町長に就任、町長在職中から歌詩「二荒」を発行、書道に執心し、昭和十四年退職すると歌と書に没頭、独自の境地を開拓し、詩趣に富む画を描いた。昭和十七年川合玉堂、清水三溪（比庵の弟）らと野水会を組織、晩年には奥村土牛、小倉遊亀らと有山会を創立、歌誌「窓日」を主宰するなど比庵芸術の幅は広く、ゆたかな詩情をたたえ、人の心によびかける主張があった。昭和四十一年には正月の宮中新年歌会始めの儀に召人に選ばれ、御題「声」の一首を詠進、また昭和三十三年日光市、昭和四十六年高梁市からともに名誉市民の称号を受けている。日光町退任後は東京都に在住したが、愛郷心あつく、郷里高梁市をはじめ岡山県下にもしばしば帰って、各地に足跡を残している。著書に「比庵歌・書・画」「紅をもて」がある。昭和四十九年高梁高等学校発行「松籟」の表紙は比庵の書である。



犬養毅（1855～1932）



政党政治家。木堂と号す。備中庭瀬村字川入（現岡山市川入）の郷土（大庄屋）源左衛門の二男として生まれる。明治五年（1872）小田県庁地券局に勤め、明治八年上京。共慣義塾を経て翌年慶応義塾に転学、明治十三年卒業直前に退学した。この間、「報知新聞」に寄稿、西南戦争従軍記者として名声を博した。明治十三年豊川良平とともに「東洋経済新報」を発刊、翌年統計院権少書記官に任命されたが、明治十四年の政変に伴い、大隈重信に従って退官した。明治十五年立憲改進黨の創立に参画、「郵便報知新聞」「秋田日報」を経て、「朝野新聞」の編集をしながら大同団結運動を推進、大隈の腹心として行動した。同年東京府会議員に当選、明治二十三年第一回衆議院議員選挙以来、毎回岡山県から当選した。明治二十七年中国進歩党、明治二十九年進歩党を結成、松方正義内閣を支持して薩派に接近、明治三十一年自由党・進歩の合同した憲政党に参加、隈板内閣で尾崎行雄が共和演説事件で辞職後文部大臣に就任、同党の分裂後は憲政本党に属し、以後長く野党少数政党の幹部として薩閥打倒に励んだ。明治四十三年立憲国民党を創立したが、党内改革派と別れ、大正二年（1913）政友会の一部とともに、第一次護憲運動に参加している。大正七年以降は、普通選挙の実現と軍縮を主張し、大正十一年革新倶楽部を組織、翌年第二次山本権兵衛内閣の逋信大臣となった。大正十三年清浦奎吾内閣の成立にともない第二次護憲運動に参加、政友会、憲政党ともに護憲三派を形成、加藤高明内閣（護憲三派内閣）で再び逋相に就任している。大正十四年政友会と合同、自ら政界引退を表明したが、昭和四年（1929）田中義一の後任難から政友会総裁に就任、昭和六年首相となり、満州事変後の難局に当たった。翌年五月、いわゆる五・一五事件で海軍中尉山岸宏、三上卓ら数人の青年将校が官邸を襲撃、「話せばわかる」「問答無用、撃て」のやり取りの後、拳銃で撃たれ、同日夜半死去した。生前は眼光鋭く、気節に富み、気力旺盛、情に厚く、清貧に甘んじたといわれる。また文章を能くし、書は枯淡、一家を成し、刀剣にも親しんだ。なお高梁中学校へは明治四十三年（1910）六月来校し、全教職員、生徒に講演を行っている。